

【論文】

主体的な学びを創発する場づくりの実践に関する研究

PaKT Osaka の「リベラルアーツ勉強会」の事例から

Emergence of Proactive Learning through Research on the Practice of Place Making

From the Example of "Liberal Arts Study Group" at PaKT Osaka

西口 優毅（同志社大学大学院総合政策科学研究科）

NISHIGUCHI Yuki (Graduate School of Policy and Management, Doshisha University)

要約／Abstract

大学教育において「主体的な学び」が注目されるようになり、アクティブ・ラーニング形式の授業が増加し、社会では主体的に自ら考え、他者と共に協働し、学び続ける人材が求められている。しかし、主体的な学びが増加する一方で、学生の意識は主体性があると言い難い。そこで、主体的な学びを創発する場づくりの実践として「リベラルアーツ勉強会」を企画・実施した。本研究では、リベラルアーツ勉強会に参加する大学生にどのような影響があったのかを M-GTA を用いて分析した。その結果、主体的な学びを創発するためには、従来型のインプット前提の学び型ではなく、自らの学びを発表したり、自身の意見を語ったり、自分で勉強会を開催してファシリテーションしたりするなど、アウトプットができる場の重要性が示唆された。

In university education, "Proactive learning" has been gaining attention, and the number of classes employing active learning methods is increasing. Society demands individuals who can think proactively, collaborate with others, and continue to learn. However, while Proactive learning is increasing, it is difficult to say that awareness of students is proactive. Therefore, I planned and implemented a "Liberal Arts Study Group" as the practice of place making of Proactive learning. In this study, I analyzed what kind of influence there was on university students who participated in Liberal Arts Study Group using M-GTA. As a result, in order to create Proactive learning, it is necessary to present one's own learning, express one's own opinion, hold study sessions and facilitation, instead of the conventional input-based learning type. The importance of a place where output can be made was suggested.

キーワード／Key word

大学生、生徒化、主体的な学び、作り手、アウトプット

University student, Studentification, Proactive learning, Creator, Output-Oriented

1. 序章

(1)研究背景

①主体的な学びとアクティブ・ラーニング

近年、大学教育において「主体的な学び」が注目されるようになった。文部科学省 (URL 1) は「主体的な学び」を「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次に繋げる」と定義している。2017 年度に発表された新しい学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現」が大きく掲げられ、学びの改革が進められようとしている。そして、主体的・対話的で深い学びの実現のための手段として、小学校、中学校、高等学校では、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善が求められている。

アクティブ・ラーニングとは、文部科学省 (URL 2) の定義では、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習方法の総称」とされている。また、溝上 (2014) はアクティブ・ラーニングを「一方的な知識伝達型講義を聴くという (受動的) 学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している。

大学においても同様であり、近年の大学教育改革により、アクティブ・ラーニング形式の授業を受ける機会が大幅に増加している。例えば、産学連携、産学官連携による新しい時代に求められる人材の育成を目的として、組織された「大学コンソーシアム京都」がある。大学コンソーシアム京都は、多様な大学・短期大学が立地する「大学のまち・学生のまち」という京都の特性を活かし、1994 年には前年に京都市役所がまとめた大学振興政策をもとに私立大学間の連携で京都・大学センターが発足し、同センターをもとに 1998 年には国公立大学も参画して全国初の大学コンソーシアムとして設立された。ここでは、京都の世界遺産が抱える課題に対して、課題解決策を立案・提案する「京都世界遺産 PBL 科目」や、京都にある博物館が抱える課題の解決策を提案する「京都ミュージアム PBL 科目」を開講し、様々な大学・学部・学年の大学生が受講している。

大東 (2021) は、アクティブ・ラーニングと大学改革に関連した研究の動向を論考増加期 (2012 年～2014 年)、論考多数期 (2015 年～2017 年)、論文減少期 (2018 年～2020 年) と

三つに分けてまとめた。論考増加期 (2012 年～2014 年) では、文献の数が急増し、大学のカリキュラム改革や教授法改善が議論された。特に、教員養成課程や情報基礎教育の改善が焦点となった。論考多数期 (2015 年～2017 年) には、高大接続改革、ルーブリックの導入、イノベーション人材の育成が進み、大学内外での教育連携が強調された。論文減少期 (2018 年～2020 年) には、文献数は減少したものの、教育改革の一環としてアクティブ・ラーニングが引き続き重要視され、教育システムの一貫性や地域連携型教育の重要性が議論された。大東 (2021) は、アクティブ・ラーニングは卒業生の進路保障という大学教育の質を高めるために必要であるとし、実施にはカリキュラム改善や教学ガバナンスの強化の必要性を挙げた。また、社会に出る学生を育てるため、小中高大を一体化した教育改革と連携も重要だとし、地域との協働によるコミュニティ・スクールの枠組みが、アクティブ・ラーニングによる学生の学びを支える可能性が示された。

②社会が求める「主体性」とその実態

日本経済団体連合会 (URL 3) が実施した「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果」では、大卒者に特に期待する資質として、企業の約 8 割が「主体性」「チームワーク・リーダーシップ・協調性」を挙げており、「学び続ける力」を選択した企業も 4 割近く存在した。そして、日本経済団体連合会 (URL 4) では、提言「新しい時代に対応した大学教育改革の推進—主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて」において、経済界が期待する大学教育改革が述べられていた。概要としては、大学は内外の環境変化に対する感応度を高めることが必要であり、教育内容を不断に見直すべきであるとした。今後、変化の激しい人生 100 年時代にあたり、大学には、大学生のような若者の教育のみならず、社会人の「学び直し」の場としての役割も期待されている。大学生に対しては、前述の通り、大学は卒業後の進路保障という大学教育の質を高めるためカリキュラム変革、小中高大を一体化した教育改革、地域との協働によるアクティブ・ラーニングが求められている。日本経済団体連合会 (URL 4) は、産学官連携による「仕事と学びの好循環」の実現を目指しており、大学におけるリカレント教育プログラムを拡充すべきであるとした。以上からわかるように、これからの予測可能な変化の激しい時代では、「主体的に自ら考え、他者と共に協働し、学び続ける人材」が求めら

れている。

しかし、2021 年の第 4 回大学生の学習・生活実態調査報告書 (URL 5) では、「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業」を選好する学生や、学生生活においては、「大学から指導・支援してほしい」と考える学生は年々増加している。学習指導要領の改訂や、大学教育改革の推進によって、初等教育・中等教育・高等教育において、アクティブ・ラーニング形式の授業のような「主体的な学び」が増加する一方で、大学生の学習に対する姿勢は受動的な傾向が見られる。

③学生「生徒化」

大学生における主体性の欠如の一要因として、大学生の「生徒化」が挙げられる。大学生の生徒化を最初に指摘した伊藤 (1999) は、学生には「学校や教師に依存せずに自律的に学ぶ」という含意が込められているとし、「そもそも『学生』であり、生徒ではないとされている大学生について、彼らが『生徒と化す』現象」を生徒化と定義した。

そして、生徒化の構成要件として伊藤 (1999) は、1) 自分は成熟へ向かう段階の途上にある未熟者であり、学ぶべきことがまだ多く残っていると認識する「未熟性」、2) 学ぶべきことは学校が用意し、教えてくれる (= 自分で見つけ、身につけるのではない) と認識する「他律性」「依存性」、3) 自分を専ら上記のような存在 (= 生徒) として位置づけ、行動するため、ほかの側面が希薄である「一面性」の 3 点を挙げた。大学生の生徒化が進んだ社会背景として、竹内 (2014) は「大学の顧客サービス業化」を指摘した。例えば、入学時の丁寧なガイダンスやオリエンテーション、担当教官による学業指導、各種資格の取得のための指導、就職指導などが挙げられる。つまり、学生の生活の様々な場面においてきめ細やかなケアを行うことが、よりよい教育サービスの提供であるとされ、「生徒指導」のように、大学は学生の生活に介入し、指導するようになった。

④大学生教育における新たな挑戦

企業としては新規学卒者には「主体性」を求め、大学としては「主体的な学び」を実現するために、アクティブ・ラーニングを導入している一方で、実際には大学生の主体性のなさが指摘され、大学生の「生徒化」が発生している。2022 年度より、高等学校で新たに「総合的な探究の時間」が必修科目に含まれたように、探究学習への取り組みが進んでいる。しかし、現状

の日本の教育システムでは、教師が問題の解き方や答えを示し、生徒はそれを真似して問題を解いていくような受動的な学び方が依然多い。

そこで、本論では、社会人の一歩手前である大学生が生徒化してしまう社会問題に対して、「学び」という観点から、「リベラルアーツ勉強会」を企画・実践し、主体的な学びを創発する場づくりの社会実験を行なった。筆者は 2020 年より、京都市左京区にある社会的企業 PaKT company 合同会社 (以下、PaKT) に学生メンバーとして所属し、小中高生対象の教育プログラムや、大学生を対象とした教育コンテンツを企画・実施している。2021 年度より、PaKT Osaka プロジェクトを立ち上げ、同志社大学大阪サテライト・キャンパスを拠点に、主体的な学びを創発する場づくりの実践として「リベラルアーツ勉強会」を企画した。リベラルアーツ勉強会とは、参加する大学生が日々の生活の中で疑問に思ったことや、参加者と一緒に考えたいことを、プレゼンテーションやワークショップとして準備し、それぞれのテーマを様々な観点・学問領域から考え、議論する勉強会である。リベラルアーツ勉強会は、2021 年 12 月より開始し、一週間に 1 回の頻度で、同志社大学大阪サテライト・キャンパスにて開催している。勉強会のテーマは様々なものがあり、例えば「バックキャスト思考」「“ゾンビ” から考える小哲学」「潜在意識とイメージ力」「自然教育と環境リテラシーの関係」などがある。本研究では、社会実験を行う中で、リベラルアーツ勉強会に参画した大学生の意識・行動変容プロセスを明らかにするために、インタビュー調査と、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、M-GTA) による質的研究分析を行い、主体的な学びを創発する場づくりについて考察する。

(2)研究課題

①研究目的

本研究では、大学生が生徒化している社会課題に対して、「学び」という観点から、主体的な学びを創発するための社会実験として、リベラルアーツ勉強会を企画・実践する。本研究では、社会課題に対して、小グループにおいて研究者と個々の問題の当事者が基礎的研究で解明し、得られた知見を社会に還元して現状を改善することを目的とする実践と研究を統合した「アクションリサーチ」の手法を用いる。アクションリサーチを体系づけて提唱したのは Lewin である (Lewin 1946)。彼は「よい理論ほど役に立つものはない (There is nothing so

practical as a good theory.)」という言葉を残しており、実際の社会の諸問題に適用できるような研究と実践を志向していた。

そして、大学生がリベラルアーツ勉強会に参加し、ワークショップやプレゼンテーションを準備・実践する中で、大学生の意識・行動変容がどのようなプロセスとなるのかを明らかにする。リベラルアーツ勉強会を通じて、受動的ではなく、能動的な姿勢が大学生に現れるのか、主体的な学びが創発するのかを考察し、大学生の生徒化という社会課題に対する社会実験「リベラルアーツ勉強会」の意義を考える。

(2)研究方法

本研究では、リベラルアーツ勉強会を「主体的な学びを創発する場づくり」の社会実験として、以下のリサーチクエスチョンを基に調査・分析を行う。

【リサーチクエスチョン】

リベラルアーツ勉強会は大学生の学びの姿勢にどのような影響を与えるのか？

分析方法としては、1)半構造化インタビュー、2)M-GTA による質的データ分析を行う。勉強会への参加や勉強会の企画・実践によって、大学生の姿勢にどのような影響を与えるのかを明らかにするために、参加者かつ勉強会を実施した学生にアポイントメントを取り、半構造化インタビューを実施する。その後、M-GTA を用いて、インタビューデータからリベラルアーツ勉強会に参加する大学生にどのような影響があったのかを概念化・図解化する。その上で、社会実験の考察を行い、本論のテーマである「主体的な学びを創発する場づくりとは何か」という問いに対して、結論を述べる。

2. PaKT Osaka とリベラルアーツ勉強会

(1) PaKT Osaka

①PaKT company 合同会社

PaKT (URL 6) とは、筆者が 2020 年よりメンバーとして関わっている京都市左京区にある社会的企業である。PaKT は 2010 年 5 月に創設され、「ツくるを学ぶ環境」をコンセプトに、若者向けの勉強会やプロジェクトを実施している。PaKT の代表である松榮 (URL 7) は、PaKT の事業について「これからの社会へ羽ばたく若者が学ぶ環境だからこそ、『これからの社会がどのような社会なのか』『そんな社会で頼られる人とは、どんな人なのか』を常に考え、プログラムに落とし込んでいます。」と述べて

いる。

PaKT にはさまざまな事業やプログラムがある。例えば、1) 組織のための組織ではなく、個人のための組織として「ひとりのやりたい」を「みんなで叶える」PaKT 唯一の意思決定の場である「パクトノカイギ」、2) 『留学』は『海外』だけじゃない」をコンセプトに、日本の中山間地域や離島で、持続可能なカタチで現在まで残ってきた地域の在り方を Art of Living (暮らしの芸術) として捉え、その価値を見つめ直し、大学生を中心とする若者が体験と座学、仲間との共有を通じて学ぶプログラムである「村・留学」、3) PaKT で活動する大学生と、塾で勉強をしている小・中・高校生が同じ場所にいることによって、大学生が手本となって小・中・高校生が進路をイメージできる「勉強した先が見える塾」である「同一空間型個別指導塾マナビノバ」、4) 「研究という武器を小中高生に」をコンセプトに、探究学習ではなく研究に焦点を当てた日本で最初の事業である「小中高生のための大学院 Coda school」(URL 8)、関係資本・自然資本・貨幣資本を学ぶプログラムを実施している。

(2)PaKT Osaka

筆者は、2021 年 12 月、大阪府に住む PaKT の学生メンバーが増えたことと、対面で集まり深い対話ができる機会を作るために、PaKT のコンセプトである「ツくるを学ぶ環境」を大阪に展開することを目的に PaKT Osaka を立ち上げた。PaKT Osaka は、大阪駅から徒歩 5 分にある同志社大学大阪サテライト・キャンパスの教室を拠点とし、「大学の講義とは、少し違った 90 分間を」をコンセプトに週 1 回程度のペースで、リベラルアーツ勉強会を開催している。

(1)リベラルアーツ勉強会

①リベラルアーツ勉強会の企画背景

リベラルアーツ勉強会は、主体的な学びを創発する場づくりの実践として企画した社会実験である。前述の通り、現在の日本社会の現状は、企業は新規卒者に「主体性」を求め、大学は「主体的な学び」を実現するためにアクティブ・ラーニングを導入している一方で、大学生の主体性のなさが指摘されている。そして、大学生が生徒化してしまうという社会課題が生まれている。

前提として、大学生の学びの「場」は、大学での講義や、ゼミナール、部活動、ボランティア活動、サークルでの活動、学生団体、企業インターンシップ、アルバイトなど多岐にわたる。

これらの場を通して、新たな知を獲得し、他者と対話を行うことで、知が蓄積される(野村ほか 2010)。そして、「学び合い」は一人で実践できるものではなく、2 者間以上のコミュニケーションに依存する前提がある。従って、本研究における社会実験では、大学生が 2 者間以上のコミュニケーションを行える環境を作り出すために、様々な学部・学年の大学生が集まり、他者と対話できる機会を作るために、約週 1 回の頻度で「リベラルアーツ勉強会」を実施した。これにより、学び合いをするための「場」をデザインした。

また、「リベラルアーツ勉強会」という名前にした理由は、特定の分野だけを学ぶのではなく、様々な学問分野の知見を身につけることで、社会で自由人として生きていくための技術を獲得していく中で、主体的な学びの姿勢が大学生に表れるのではないかと考え、リベラルアーツ勉強会と名付けた。

②リベラルアーツ勉強会の概要

リベラルアーツ勉強会は、参加する大学生が日々の生活の中で疑問に思ったことや、参加者と一緒に考えたいことを、プレゼンテーションやワークショップとして準備し、それぞれのテーマを様々な観点・学問領域から考え、議論する勉強会である。勉強会のテーマは、プレゼンテーションやワークショップを企画者として実施する大学生や、参加する大学生たちによって決めた。勉強会を実施するために準備してきた一人の大学生から学ぶことを重要視した。前述の通り、リベラルアーツは人間を理解するために、知恵を与えてくれる。人の心が動かされ、長く受け続けてきたものが、文学、哲学、芸術、文化という形で存在している。そのようなリベラルアーツを一人の大学生から、その人の等身大の学びを受け取ることで、話をする彼・彼女に参加者が関心を持ちながら議論できるようにデザインした。

リベラルアーツ勉強会に参加するためには、イベント管理サービスである「Peatix」上にあるイベントページの参加チケットを登録する必要がある。主に大学生対象であることからチケットは無料とした。リベラルアーツ勉強会には、同志社大学の学生のみならず、京都大学や、立命館大学、龍谷大学、平安女学院大学、関西外国語大学、大阪工業大学、京都外国語大学など、これまで多様な大学生が参加した。また、会場である同志社大学大阪サテライト・キャンパスが大阪駅の近くであるため、一定数ではあるが社会人が参加している。新型コロナウイルス

感染症によって対面開催が厳しい場合では、Zoom を使用したオンライン形式で勉強会を開催し、早稲田大学、琉球大学、宮崎国際大学といった関西圏以外の学生が参加した。なお、リベラルアーツ勉強会は、2021 年 12 月～2022 年 7 月の期間で 19 回開催し、延べ 98 名(平均参加数 約 5 名)が参加した。



写真 1 リベラルアーツ勉強会の様子(筆者撮影)

3. 調査・分析

(1)半構造化インタビュー

①インタビュー

リベラルアーツ勉強会への参加と、作り手として勉強会の企画・実践によって、大学生の姿勢にどのような影響を与えるのかを明らかにするために、参加者かつ勉強会を実施した学生にアポイントメントを取り、半構造化インタビューを実施した。今回、インタビューを行った学生は以下【表 1】の通りである。なお、本研究では、インタビュー調査において個人情報扱ったため、調査協力者のプライバシー保護や人権の保護に最大限の配慮を行なった。また、調査に際しては、研究の目的を調査協力者に対して十分に説明を行い、インタビュー実施と録音の承諾を得て、インタビュー実施者の問い合わせ先等を明示したうえで、必要な範囲の個人情報に限り、情報を収集した。

その後、M-GTA を用いて、インタビューデータから勉強会に参加する大学生にどのような影響があったのかを概念化・図解化し、リベラルアーツ勉強会の有用性を考えた。なお、M-GTA を考案した木下(2003)によれば、何人程度のインタビューデータがあれば妥当かという問いに対しては、おおよその目安として 10～20 人としているが、M-GTA は度数による分析ではないので、対象者の数が最低何人必要かという問題はないとしている。むしろ、人数自

表 1 インタビュー一覧(筆者作成)

名前	大学	学年	性別	勉強会実施回数
A さん	京都大学文学部	4 年	男性	9 回
B さん	同志社大学政策学部	2 年	男性	3 回
C さん	同志社大学政策学部	2 年	男性	2 回
D さん	同志社大学社会学部	2 年	女性	2 回
E さん	同志社大学社会学部	2 年	女性	1 回

体ではなく、データの範囲の限定理由の方が重要だとする。本論文では、調査協力者を「参加者かつ勉強会を実施した学生」に限定した。なお、勉強会を実施したとは、自らの関心のあるテーマについて、ワークショップやプレゼンテーションを準備して、勉強会を開きファシリテーションした学生を指す。

②インタビュー項目

半構造化インタビューとは、「どのインタビューでも取り上げる共通の質問項目を一定数設けるとともに、インタビュアーが問いを自由に投げかけることができる」(野村 2017) インタビュー方法である。インタビューは一人につき 40 分から 1 時間程度で実施した。質問項目は以下の通りで、インタビュアーによって質問の順番や、深掘りして質問する内容は異なる。

【インタビュー項目】

- 1) リベラルアーツ勉強会に参加する前と参加した後で、自分が変化したと思うところはあるですか？それは何ですか？
- 2) 自ら勉強会を準備し、実践する中で、他者からのフィードバックや、それによる気づきはありましたか？それはどんなことですか？
- 3) 勉強会に参加する立場と、勉強会を準備・実践する立場とでは、自分の行動に違いはありましたか？
- 4) 勉強会を実践する前と実践した後で、自分が変化したと思うところがありますか？(例：普段の生活における変化、大学生活における変化など)
- 5) 大学のゼミ活動と、リベラルアーツ勉強会の活動の違いはありますか？それは何ですか？

(2)M-GTA による分析

①M-GTA

半構造化インタビューを実施した後、インタビューデータの文字起こしを行い、M-GTA の手法に基づいて分析を行った。M-GTA とは、社会学者の木下 (2003) が、質的研究手法の一つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチに独自の修正を加えた質的研究の方法論であり、データに密着した分析から理論をつくり出す分析方法である。

第一に、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、GTA) は Glaser と Strauss によって 1960 年代に考案された質的研究法であり、「データをもとにして分析を進め、データの中にある現象がどのようなメカニズムで生じているかを『理論』として示そうとする研究法」である (戈木 2016)。理論は概念同士の関連を文章で表現したものという意味から、戈木 (2016) によると、GTA は「データから概念を抽出し、概念同士を関連づけようとする方法」と言える。また、戈木 (2016) は、GTA が結果として提示するのは、個々の事例がどのようなものかということではなく、「データに含まれる現象の構造とプロセス」とであるとした。

第二に、M-GTA は GTA の修正版である。木下 (2007) は M-GTA の特性として、次のようにまとめた。まず、「オリジナルで示された基本特性の継承」としては、1) 理論生成への志向性、2) grounded-on-data の原則、3) 経験的実証性 (データ化と感覚的理解)、4) 応用が検証の立場 (結果の実践への還元) の 4 点が挙げられている。「課題点の克服」としては、1) コーディング方法の明確化 (分析プロセスの明示)、2) 意味の深い解釈、3) 60 年代の限界 (素朴な客観主義) と近年の質的研究動向に対して独自の認識論 (インタラクティブ性) の 3 点を挙げている。

M-GTA は、理論生成への志向性、grounded-on-data 等の根底の研究思想は継承し、分析プロセスの明確化や、オリジナル版の GTA が考案されてからの学術的議論を踏まえて修正されている。特に、GTA ではデータの分析の際に、客観的に切片化を実施する一方、M-GTA では「研究する人間」を明確にし、主観を重要視している。

本研究は、リベラルアーツ勉強会に参加し、かつ勉強会を実施した学生にはどのような変化が生まれたのか、また、どのようなプロセスで主体的な学びが創発されていったのかというプロセスを明らかにし、本論において設定したリサーチクエスションに対してどう結論づけることができるのかを考察する。

②分析ワークシート

M-GTA の手法プロセスに従い、分析テーマを「リベラルアーツ勉強会での勉強会実践による大学生の意識・行動変容プロセス」とし、分析焦点者は、リベラルアーツ勉強会の参加者かつ勉強会を実施した学生5名とした。5名のインタビューデータを文字起こしした後、表2のような分析ワークシートを用いて、概念生成を行った。

表2 分析ワークシートの例
(木下 2020 を参考に筆者作成)

概念名	定義を表現した言葉
定義	検討の結果、 採用することにした解釈
具体例	概念生成の基になったデータ部分 (インタビューデータの一部)
理論的 メモ	解釈の思考プロセス

分析ワークシートは、概念名、定義、具体例、理論的メモで構成される。分析の流れとしては、まず1人目のインタビューデータを分析対象として概念作成を開始した。その中で、学びに対する意識の変容や、その後の行動の変化に関する概念を作成することができた。そして、2人目、3人目と、データ分析を行い、その都度作成した概念を整理した。以前作成したワークシートの概念と重なる内容があれば、そのワークシートに加筆した。概念は異なっているものの、内容が近いものが集まった場合は、概念名や定義を見直し、それらをあらわす新たな概念に書き換えた。理論的メモには、具体例についての解釈や、理論的な枠組み等を記述し、対立する事例についても記録して検証した。分析を行う際は、多様な視点を取り入れることを留意した。1回目に収集したインタビューデータをもとに分析をスタートし、分析と同時進行でデータの追加収集を行い、最終的にはほぼ新しい概念がでない「理論的飽和」に至った。理論的飽和とは、ある領域で要素を集めていき、それらを似ているもの同士を同じカテゴリーにいていくことを継続すると、ある時点で以上新しいカテゴリーが発生しなくなる状態のことで、理論的飽和になると M-GTA の分析は終了となる。

(3)分析結果

①生成された概念とそのカテゴリー

前述の分析プロセスを通じて、16 の概念が生成された。その後、M-GTA の分析プロセス

に従って、また、各概念の類似性や相互関係などを検討して、10 のカテゴリーを作成した。その結果を、下の表3のようにまとめた。なお、《 》は概念名、【 】はカテゴリー名という形式で記述する。

②結果図とストーリーライン

生成された概念と、各カテゴリーの関係性を踏まえて「リベラルアーツ勉強会での勉強会実践による大学生の意識・行動変容プロセス」を図1のように図解化した。

結果図のストーリーラインとしては以下の通りである。まず、《単位取得が第一の目的にくる大学の授業》が【学生の前提意識】として存在することがわかった。大学の授業では、学期の初めに履修登録を行い、その後出席していく。リベラルアーツ勉強会では、毎回 Peatix でチケット登録を行い、【参加】している。これにより、《参加という「選択」による主体化》が起こり、わざわざ時間を作って参加することで受動的ではなく、能動的な姿勢で勉強会に来ることができる。【リベラルアーツ勉強会の環境】としては、勉強会に参加する中で、学生がこの場所は《自分の意見をさらけ出せて安心できる場所》と認識していた。同時に勉強会という場所を利用して、勉強会を企画する学生が新たな挑戦を行う《試行錯誤の環境》が生まれた。

その上で、勉強会に参加することで改めて【学び】という観点において、《学ぶことへの楽しさ》を参加者が感じていることがわかった。また、勉強会を企画・実践する学生は、《他者への関心によって生まれる能動的な努力》によってプレゼンテーションやワークショップなどのやり方を工夫する意識が芽生えた。つまり、【他者への関心】を向けることによって、勉強会を企画する学生はモチベートされていく。また、学生が勉強会に「作り手」として参加する中で、勉強会が自分の思うように成功できた場合は《作り手の喜びの経験》を得ることができ、自分が思うようにはできなかったときは、他者からの《フィードバックによる自己内省》を行っていることがわかった。これらが【勉強会の実践による効果】である。

そして、学生が【作り手・企画者としての体験】を得ることで、《作り手・企画者経験による気づき・学び》を獲得したり、普段の大学生活や日常生活においても、《作り手・企画者視点による行動変容》が起きたり、《作り手・企画者視点による想像力の向上》が確認できた。リベラルアーツ勉強会で繰り返し、勉強会を企画・実践する中で、大学で学んだことを勉強会

表3 生成された概念と定義、及び各カテゴリーについて(筆者作成)

カテゴリー名	概念名	定義
【学生の前提意識】	《単位取得が第一の目的にくる大学の授業》	大学生の実情として、大学の授業を受ける目的が単位取得になっていること
【参加】	《参加という「選択」による主体化》	リベラルアーツ勉強会に参加申込をするという「選択」をすることによって、参加者が主体を持って勉強会に来ること
【リベラルアーツ勉強会の環境】	《自分の意見をさらけ出せて安心できる場所》	リベラルアーツ勉強会が、自身の意見を肯定してくれるという安心感を感じられる場所であること
	《試行錯誤の環境》	勉強会を企画する上で、リベラルアーツ勉強会が新しいことにチャレンジしてみようと思う環境であり、トライアンドエラーができる場所であること
【学び】	《学ぶことへの楽しさ》	リベラルアーツ勉強会に参加したことで実感する「学び」の楽しさ
【他者への関心】	《他者への関心によって生まれる能動的な努力》	リベラルアーツ勉強会に参加する他者がいることによって、「いいものを作ろう」というような努力が生まれること
【勉強会の実践による効果】	《作り手の喜びの経験》	自身が企画した勉強会に対して、他者からポジティブな感想をもらったときに感じる「作り手」としての喜び
	《フィードバックによる自己内省》	自身が企画した勉強会が、うまくいかなかったり、他者の反応が想像とは違っていたりすることに対して感じる感情の動き
【作り手・企画者としての体験】	《作り手・企画者経験による気づき・学び》	リベラルアーツ勉強会で、勉強会を企画・実施する経験をして気づく視点や学びのこと
	《作り手・企画者視点による行動変容》	リベラルアーツ勉強会で、勉強会を企画・実施する経験をして、「学び」に関しての行動が変化すること
	《作り手・企画者視点による想像力の向上》	リベラルアーツ勉強会で、既に勉強会を企画・実践している経験があるからこそ、他者が勉強会を実践している際に、作り手の意図や創意工夫を感じ取れるような想像力が培われていること
【学びの変容とリンク】	《大学の講義の捉え方の変容》	リベラルアーツ勉強会に参加し、勉強会を企画・実践する経験をする中で、大学の授業が楽しくなったり、今までとは違った観点から受講したりする変化があること
	《リベラルアーツ勉強会と大学の授業での学びのリンク》	リベラルアーツ勉強会で学んだことが、大学の授業にでてきたり、その逆に、大学の授業で知った知識を、リベラルアーツ勉強会で改めて学んだりするという「学び」のリンクが生まれていること
【アウトプット】	《アウトプット前提による学び》	リベラルアーツ勉強会で、勉強会を企画・実践するという作り手の経験をする中で、アウトプットが前提の学びの姿勢になるということ
【副次的効果】	《作り手・企画者経験によるスキルアップ》	リベラルアーツ勉強会で、勉強会を企画・実践するという作り手の経験をする中で、プレゼンテーションの能力が向上したり、人にうまく説明できるようになったりすること
	《人前で話すことへの慣れ》	リベラルアーツ勉強会で、勉強会を企画・実践し、人前で自分の学びを話す経験をする中で、その他の場所でも人前で話すことが緊張しなくなったり、うまく話せるようになったりすること

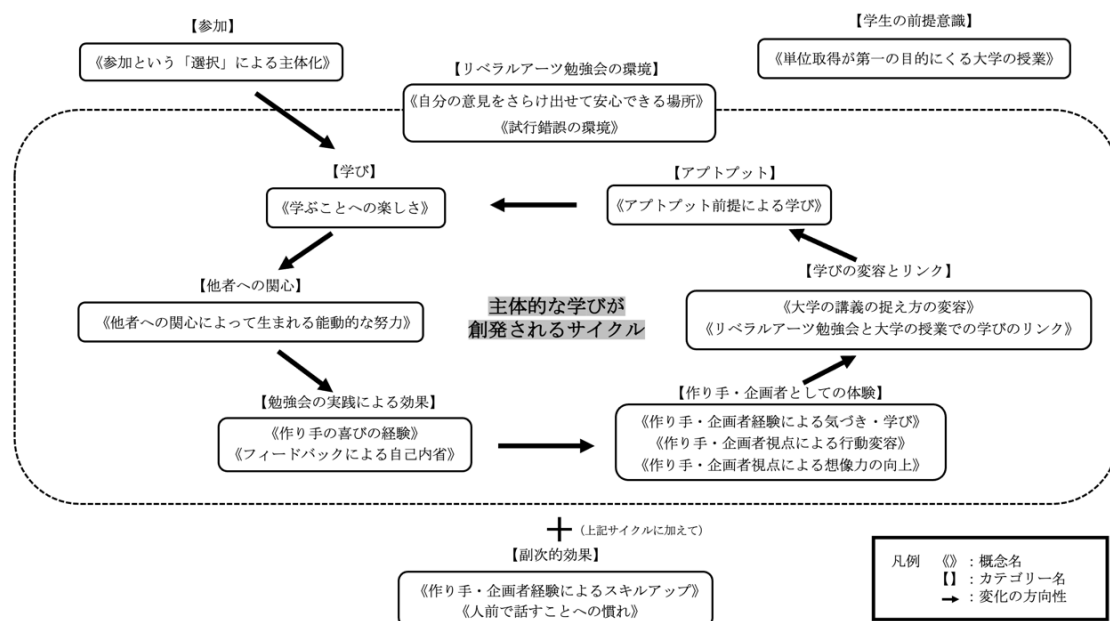


図1 リベラルアーツ勉強会での勉強会実践による大学生の意識・行動変容プロセス(筆者作成)

で披露しようとする中で、今までは受け身だった授業に前のめりに取り組めるような《大学の講義の捉え方の変容》が起きた。また、《リベラルアーツ勉強会と大学の授業での学びのリンク》が起きることで、大学での授業がより身近で面白いものだと感じる事ができたケースがあった。このように、リベラルアーツ勉強会は大学における【学びの変容とリンク】が起きている。

リベラルアーツ勉強会で自身の興味・関心に基づくプレゼンテーションやワークショップを実践した学生は、《アウトプット前提による学び》の姿勢が身につくようになり、学びにおける【アウトプット】の重要性を実感した。リベラルアーツ勉強会の【副次的効果】としては、勉強会の実践によって、《人前で話すことへの慣れ》や《作り手・企画者経験によるスキルアップ》を感じた学生もいた。

以上のことから、図1にあるようなサイクルを繰り返すことで、受け身ではなく、学生が学びを楽しみ、参加者のために創意工夫を考えたり、ワークショップを初めてチャレンジしてみたり、作り手・企画者の経験をする事で、大学での学びの深みが増え、アウトプットが前提の学びの姿勢を身につけることで、主体的な学びが創発された。

5. 終章

(1) 社会実験の考察

リベラルアーツ勉強会が大学生の学びの姿勢

に与えた影響としては、リベラルアーツ勉強会に参加することで、主体的な学びが創発されるサイクルが生まれていることが明らかになった。そのサイクルとは以下のようなものである。

勉強会に参加し、「学ぶことの楽しさ」を感じ、他者がいるからプレゼンテーションやワークショップなどのやり方を工夫する意識が芽生える。ただ、勉強会に参加するのではなく、学生が勉強会に「作り手」として参加する中で、楽しさや面白さを見出す。ここでの「作り手」とは、主体的な学びが創発する場の担い手とも言えよう。そして、フィードバックによって自己内省を行うことで、作り手や企画者経験による気づき・学びを得たり、普段の大学生活や日常生活においても、作り手・企画者視点による行動変容が起きたり、想像力が豊かになる。リベラルアーツ勉強会で繰り返し、実践する中で、大学で学んだことを勉強会で披露しようと思うことで、授業に前のめりに取り組めたり、大学の講義とリベラルアーツ勉強会の学びがリンクしたりと、大学の受講姿勢にも影響を与えた。また、リベラルアーツ勉強会の副次的効果として、勉強会の実践によって、人前で話すことに慣れた学生や、スキルアップをしたと認識している学生もいた。そして、リベラルアーツ勉強会で自身の興味・関心に基づくプレゼンテーションやワークショップを実践した学生は、アウトプット前提の学びの姿勢が身につくようになる。リベラルアーツ勉強会では、以上のような「主体的な学びが創発されるサイクル」が循環しており、この結果、リベラルアーツ勉

強会には大学生の学びの姿勢を主体化させる可能性があることが考えられる。

本研究におけるインタビューの中で、Aさんが唯一の大学4年生であり、参加回数も9回であった。Aさんは、より多くの経験を積むことで主体的な学びの姿勢が強く形成されている可能性がある。特に、インタビューを通じて、ファシリテーションのスキルが向上し、他者との協働や意見交換の場で積極的に関与する姿勢が見られた。一方、Bさん・Cさん・Dさん・Eさんは大学2年生であることから、まだ学びの初期段階にあり、主体的な学びの形成には時間と回数が必要であることが示唆される。このため、継続的な参加が学びの深さと質を向上させる要因となると考えられる。以上のことから、年次と参加回数が主体的な学びの形成に影響を与える重要な要素であると考えられる。今後の研究では、より多くのデータを収集し、具体的な年次別・参加回数別の分析を行うことで、さらに詳しい考察を行う必要がある。

(2)主たる結論

①主体的な学びを創発する場づくりとは何か

大学生がリベラルアーツ勉強会で他者に自身の学びを語ろうとしたり、勉強会を準備したり、成功や失敗、場づくりの経験を重ねる中で、主体性を持った学びの姿勢が形成されることが分かった。主体的な学びを創発するためには、インプット前提の学び方ではなく、自らの学びを発表したり、自身の意見を語ったり、自分で勉強会を開催してファシリテーションしたりするなど、アウトプットができる場の重要性が示唆された。これが「主体的な学びを創発する場づくり」である。また、大学改革の一環として、アクティブ・ラーニングの実践が進む中で、学生が自ら学びの場を設け、そこで得た知識や経験を共有することの重要性である。リベラルアーツ勉強会の活動を通じて、学生は他者との対話を重ねる中で自己の学びを深化させる。教育機関はこうした主体的な学びを促進する環境を提供し、学生が自主的に学びの場を創り出すことを支援することが望ましい。

日本社会においては、企業は新規学卒者に「主体性」を求め、大学は「主体的な学び」を実現するために、アクティブ・ラーニングを導入している。しかし、実際には大学生の主体性のなさが指摘され、大学生の「生徒化」が社会課題となっていた。アクティブ・ラーニングは、文部科学省（2012）によれば、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習

方法の総称」とされている。また、溝上（2014）はアクティブ・ラーニングを「一方向的知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義している。つまり、アクティブ・ラーニングには能動的な学習が必要である。

リベラルアーツ勉強会では、作り手になる経験をすることができ、アウトプット前提の学びを体験的に学習し、他者からのフィードバックを受けて自己内省を行なうことができる。確かに、書く・話す・発表するという活動はアクティブ・ラーニングにおいて重要な要素である。しかし、自分の頭で考え、何かを企画するという「作り手」の経験こそ、能動的な学習を実現する上で重要な要素ではないかと考える。本来、学生は学校や教師に依存せずに自律的に学ぶ存在である。自らの考えを他者に伝えるために、様々なことを試してみたり、本を読んでみたり、人が理解しやすい話し方は何かと考えてみたりするような「作り手」の経験を積むことで、能動的な学習を実現できる。学生の生徒化という社会課題に対して、リベラルアーツ勉強会は「主体的な学びを創発する場づくり」の一つのソーシャル・イノベーションのモデル開発となったと考えている。

②今後の課題と展望

本研究の主な課題としては、「アクションリサーチ」という研究手法を採用しているため、研究者自身が社会実験そのものに内部から深く関わりを持つことになるため、客観性の担保をすることが難しい。インタビュー調査においても、リベラルアーツ勉強会の発案者である筆者がインタビュアーとして調査を行なっているため、研究対象者に影響を与えていることが考えられる。一方で、芳賀ら（2020）は、アクションリサーチを伝統的な実証主義的研究とは異なる新しい研究デザインとして定義しており、特定の現場の課題を現場の人々と共に解決することを目的としている。また、従来の「介入」研究とは異なり、参加者全員の共同学習プロセスを重視する特徴がある。そして、間主観性をアクションリサーチの重要な要素として紹介し、これがエンパワメントを促す源であると位置付けている。

また、本研究では調査協力者が5名と比較的少数に対して調査を行なった。M-GTAの分析では、木下（2003）によれば、M-GTAは度数

による分析ではなく、対象者の数が最低何人必要かという問題はないとしているが、インタビューデータのおおよその目安は 10~20 人としている。そのため、今後は社会実験を継続して実施し、新たな調査協力者にインタビューを行い、より精度を高めた分析を行いたい。

本研究の結果を踏まえて、リベラルアーツ勉強会のような主体的な学びを創発する場づくりは、これからの予測不可能な時代において必要となる「主体的に自ら考え、他者と共に協働し、学び続ける力」を育むための一助になる可

能性がある。今後は、主体的な学びを創発する場づくりのモデル開発を行い、大学教育だけでなく、小学校・中学校・高等学校、そして企業の社会人教育の現場に活かす実践方法論の構築を目指したい。

他方、本研究は実際の取り組みのみに終始してしまい、専門職と異なる市民の特性について言及することができなかった。今後の課題は、専門職の専門性と異なる市民だからこそ発揮し得る市民の専門性（市民性）を明らかにしていきたいと考えている。

引用文献

（日本語文献）

- 伊藤茂樹 (1999) 「大学生は生徒なのか—高等教育における高等教育の対象」『教育学研究論集』15、85-111。
- 大東貢生 (2021) 「アクティブ・ラーニングと大学改革に関連した研究の動向」『佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集』8、45-55。
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文社。
- 木下康仁 (2007) 「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」『富山大学看護学会誌』6(2)、1-10。
- 木下康仁 (2020) 『定本 M-GTA—実践の理論化を目指す質的研究方法論』医学書院。
- 戈木クレイグ・ヒル滋子 (2016) 『ワードマップグラウンデッド・セオリー・アプローチ改訂版理論を生みだすまで』新曜社。
- 竹内洋 (2014) 『大衆の幻像』中央公論社。
- 野村林太郎・永野直・皆月昭則・林秀彦 (2010) 「学生の「学びの場」の存在について—コンヴィヴィアルな学び合いのモデルの検討」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』7、29-32。
- 野村康 (2017) 『社会科学の考え方—認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会。
- 芳賀博・斉藤恭平・柴喜崇・佐藤美由紀・松岡正純・植木章三・安斎紗保理 (編) (2020) 『アクションリサーチの戦略—住民主体の健康なまちづくり』ワールドプランニング。
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブ・ラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。

（外国語文献）

- Lewin, K. Z. (1946) *Action Research and Minority Problem*. Journal of Social Issue, 2, 34-46.

（URL）

- URL1 文部科学省 (2017) 「平成 29・30・31 年改訂学習指導要領 (本文、解説)」文部科学省ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm)。

- URL2 文部科学省 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (答申)」文部科学省ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuko00/toushin/1325047.htm)。

- URL3 一般社団法人 日本経済団体連合会 (2022a) 「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果」一般社団法人 日本経済団体連合会ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、<https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/004.html>)。

- URL4 一般社団法人 日本経済団体連合会 (2022b) 「提言『新しい時代に対応した大学教育改革の推進—主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて』」一般社団法人 日本経済団体連合会ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、<https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/003.html>)。

- URL5 ベネッセ教育総合研究所 (2021) 「第 4 回 大学生の学習・生活実態調査報告書」ベネッセ教育総合研究所ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772>)。

- URL6 PaKT company 合同会社 (2022) 「PHILOSOPHY」PaKT company 合同会社ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、<https://pakt.jimdo.com/about-1/philosophy/>)。

- URL7 京都市ソーシャルイノベーション研究所 (2020) 「インタビュー企画「ピンチをチャンスに！」【第 4 回】松榮秀士さん | PaKTcompany 合同会社」京都市ソーシャルイノベーション研究所ホームページ 2020 年 4 月 16 日 (2023 年 6 月 30 日取得、<https://social-innovation.kyoto.jp/learning/3910>)。

- URL8 小中高生のための大学院 Coda school (2022) 「Coda school とは？」小中高生のための大学院 Coda school ホームページ (2023 年 6 月 30 日取得、<https://codaschool.com/index.php/about/>)。